

善導の指方立相説について

市 野 智 行

はじめに

中国浄土教の祖師善導（六一三～六八二）の仏身仏土觀を明らかにする上での一視点として、小論では『觀經』第八像觀を注釈する中で説示された「指方立相」説に注目する。指方立相とは「浄土が西方の方角にあることを指し示し、具体的な様相をもつて成立していること」というように、浄土が具体的に説かれるところに大きな特徴がある。このことは善導が、

或有行者。將此一門之義作唯識法身之觀。或作自性清淨仏性觀者。其意甚錯。（『大正藏』三七 二六七中）

と、唯心的あるいは自性のうちに仏性を見んとする理解（是心作仏是心是仏を根拠としている）に対し「その意甚だ錯れり」と批判的に述べていることから窺える。

また、指方立相については、その内容が二尊教・二仏構造⁽²⁾を有することも既に指摘されている。善導は二尊教について、

像觀に先立つて説かれる華座觀をはじめ、『觀經疏』のいたるところで、浄土教の救済原理として明らかにしている。⁽³⁾

しかし、像觀の注釈では、この指方立相説を提示した直後に、

立相住心尚不能得（『大正藏』三七 二六七中 傍点筆者）

と二尊の教に拠りながらも、觀法の成じ難きことを示している。なぜ善導は、指方立相の内実に二尊の立場を認めながら、「得ることあたわず」と言わねばならなかったのか。本論ではかかる点に留意し、考察を進めていきたい。

一 一經兩宗（二通りの視点）

この課題を説明していくには、像觀の逐語的な解釈ではなく、善導の『觀經』觀を念頭に置かなければならない。その一つが『觀經』の対告衆である韋提希を凡夫と押さえる点にある。これについては像觀の注釈の中でも、

末代罪濁凡夫（『大正藏』三七 二六七中）
斯乃群生障重。真仏之觀難階（『大正藏』三七 二六七下）

と衆生の存在を定義している。

そして、次に注意すべき特徴は、『觀經』の宗旨を一經兩宗と押さえた点にある。従来、慧遠によって提示されるように、『觀經』の宗旨は觀仏三昧として押さえられてきた。⁽⁴⁾それを善導は、

今此觀經即以觀仏三昧為宗。亦以念仏三昧為宗（『大正藏』三七 二四七上）

と『觀經』を觀仏三昧のみならず念仏三昧を明かす一經兩宗の經典として押さえていく。そしてこの一經兩宗という經典理解に注目するとき、像觀で「得ることあたわざる」と説かれた理由に二つの見方が成り立つのではないか。

二 觀仏三昧為宗

觀仏三昧を明かす經典とする場合、『觀經』における像觀の位置が一つの注目点となる。善導は「玄義分」釈名門の中で、

言仮正報者。即第八像觀是也。觀音勢至等亦如是。此由衆生障重染惑處深。仏恐乍想真容無由顯現。故使仮立真像以住心想。同彼仏以証境（『大正藏』三七 二四六下）

と像觀を仮の正報とする。善導は定善十三觀を大きく正依二

善導の指方立相説について（市野）

報に分け、更に正報に通別あることを示す。像觀は、正報の別中の仮の正報にあたる。⁽⁵⁾なぜ仮の正報なのか。善導によれば、衆生の障りが重く、阿弥陀仏を觀することができないであろう衆生の為に、釈尊が仮に真像を立てたものを像觀と呼ぶ。

そして、像觀に続けて真身觀の説明がなされている。

言真正報者。即第九真身觀是也。此由前仮正。漸以息於乱想心眼得開。粗見彼方清淨二報種々莊嚴以除昏惑。由除障故得見彼真實之境相也（『大正藏』三七 二四六下～二四七上）

真の正報とは、まさに阿弥陀仏そのものを觀することを意味する。そして真実の境相を見る為には乱想を止め、障を除かなければならない。その為に真身觀に先立って説かれているのが、第八像觀なのである。つまり、像觀として真像を仮立することによって、心眼を開くことができるのである。よって、像觀はあくまでも仮の正報であり、指方立相とは正しく第九真身觀への前段階であり、像觀で「相を立て心を住すともなお得ることあたわざる」と善導が押さえる理由の一つがここに見出せる。

三 念仏三昧為宗

では、次に念仏三昧を立場とする場合、先の課題にどのように対応することができるだろうか。そこでより力点が置かれ

善導の指方立相説について（市野）

るのが、「末代罪濁の凡夫」が観法という実践行に堪えうる
ことができるのかという、言わば行の判釈である。像観では
末代罪濁の凡夫が阿弥陀仏を観ずるということを、

如似無術通人居空立舎也（『大正蔵』三七 二六七中）

と示す。この譬えからは、もはや凡夫における観法の実践が
不可能であることが示唆されている。つまり、日想観に始ま
る定散十六観に対して、その行法自体が問われていることと
なる。それは、善導が流通分において、

上來雖説定散兩門之益。望仏本願意在衆生一向專称弥陀仏名（『大
正蔵』三七 二七八上）

と称名念仏をもつて『観經』の教旨として押さえていくこと
からも窺える。つまり、凡夫が阿弥陀仏の浄土へ往生するこ
とができる行こそが、称名念仏であると押さえていくのであ
る。そして、その根拠として、

定即息慮以凝心。散即廢惡以修善。回斯二行求願往生也。言弘願
者。如『大經』説。一切善惡凡夫得生者也莫不皆乘阿弥陀仏大願
業力為増上縁也。（『大正蔵』三七 二四六中）

と『大經』の存在を明記する。道綽が「なぜ西方なのか」と
いう問いに対して法蔵菩薩の誓願をもつて応えたように、善
導においても、衆生の往生の根拠とはあくまでも『大經』に
基づいていく。これに関しては、『往生礼讃』にも同様の内
容がより具体的に指摘されている。諸仏は三身同証であるの

に、なぜ『観經』では西方のみを礼念することを勧めるのか。
これに対する応答として善導は次のように述べる。

諸仏所証平等是一若以願行來収、非無因縁。然弥陀世尊、本發深
重誓願以光明名号摂十方。（『大正蔵』四七 四三九中）

善導はここで阿弥陀仏の因位、即ち法蔵菩薩の願行をその
根拠にあげる。つまり「設我得仏：若不生者不取正覺」とい
う一切衆生の救済を誓う願とそれに相応した行があるからこ
そ、西方に向かうべき意義と根拠がそこはあるというのであ
る。一方、その衆生に対しては、

但使信心求上尽一形下至十声一声等以仏願力易得往生（『大正蔵』
四七 四三九中）

と称名念仏を勧め、仏願力によって往生を得ることを述べて
いく。この『往生礼讃』の問答も、『大經』に基づく視点か
ら指方立相の内容を理解していることが分かる。

このような視座から像観や日想観での課題を見ていくと、
真身観に先立つ方便としての意味だけではなく、そこに『大
經』を背景とした称名念仏を通した観法という理解を見るこ
とができるのではないか。

おわりに

このように、日想観と像観の共通点に注目するとき、観仏
三昧と念仏三昧という二つの視点より、指方立相説の内実を

看取することができる。ただし、諸師の理解を批判するように、「是心作仏・是心是仏」の「この心」が衆生の心であるかぎり、それがそのまま仏心としてイコールで結び付けられることを、善導は徹底して認めていかない。それは指方立相説に二尊教という構造を見出していくことにも言い得ることである。「方を指し相を立てる」ことは、どこまでも末代罪濁の凡夫の為なのである。そこに、善導がどのような意味を求めていたのかということを考えた時、仮の正報と位置づけされる像観と、念仏三昧を念頭に置いた上で観仏を捉えていくといった二つの視点を見出すことができるのではないか。⁽⁷⁾

- 1 藤田宏達『善導』講談社 昭和六十年 一〇三頁。
- 2 柴田泰山『善導教学の研究』山喜房佛書林 平成十八年 六四〇～六五八頁。
- 3 定善義・第七華座観『大正蔵』三七 二六五頁下、玄義分・序題門『大正蔵』三七 二四六頁中、散善義・回向発願心釈『大正蔵』三七 二七三頁中など。
- 4 浄影寺慧遠『観無量寿経義疏』『大正蔵』三七 一七三頁上。
- 5 野上観成『観經玄義分略述』真宗大谷派出版部 昭和四十九年 六三頁を参照。
- 6 『安樂集』第六大門『大正蔵』四七 一八頁上中。
- 7 この観仏三昧と念仏三昧の關係性をどのように把握すべきだろうか。一見すると、両者は観仏三昧から念仏三昧へという展開の關係を有しているように考えられる。しかし、善導の定善

善導の指方立相説について（市野）

十三観への注釈や、指方立相説の考察を鑑みると、念仏三昧を通じた観仏三昧として捉えていくことのほうが妥当であるように思われる。展開論の場合、対立概念として論じられることがしばしばあるが、一經兩宗であるかぎり、観仏念仏兩三昧は対立關係ではないはずである。この点については今後の課題としたい。

〈キーワード〉 善導、指方立相、一經兩宗、凡夫

（同朋大学仏教文化研究所客員研究員・博士（文学））